

◆1 成敗

それは『クイーンズゲイト』での出来事！
異世界に迷い込んだ不知火舞は、ある日いつもの忍装束とは別のコスチュームを入手する！
ひらひらな装飾のついたウェイトレス衣装！
普段使っているものとはかけ離れているが、しかし絶世の美貌を持つ舞には何とも似合っていた！

……そんな衣装にコスチュームチェンジしたまま、仲間とはぐれてしまった舞。
仕方なく、仲間と合流するため喫茶店でバイトし資金集めをするのだった。

「いらっしゃいませ〜♪」

愛想よく振る舞うウェイトレスくノ一。
衣装の可愛さはもちろん、容姿と性格もあって舞の評価は極めて良好。
喫茶店は舞のおかげで大繁盛となっていた。
だが、賑わうにつれて態度の悪い客も増えることになり……

「では、ご注文は……」

もみっ♡

「っ！」

【あっとゴメンゴメン、でっかいプリンが届いたのかと思ったよ♪】

セクハラを働く悪質客も現れるようになった。
特に舞の衣装は胸も足も大きく晒しており、男はどうしても意識してしまうもの。
とはいえ、当然お触りは厳禁。
軽いセクハラであれば、舞も寛大に対応するが……

「当店ではお触り厳禁ですよ？ これからは控えてくださいね〜？」

【いやーゴメンってー♪】

もみゅっ♡

「……！」

【おっと、手が滑って！】

とぼけたフリをして舞の胸をもう一度揉む悪質客。
態度は軽薄であり、反省している様子は全く見られない。
それどころかセクハラする言い訳をのたまう始末だ。

【いやーでもこれは舞ちゃんが悪いって！ だってそんな服着てたら……ねえ？
触ってくれって言ってるようなものでしょ♪】

サービスとして露出度を上げているのに、それに付け込んで言いたい放題。
舞が悪いと言い切ったセクハラ客は、続けて舞に手を伸ばす。

【むしろこんなの、触らない方が失礼……あだだだっ?!】

「すいませえん、ご注文いただけないようでしたら、お帰り願いたいのですがぁ……？」

が、舞はそれをひねり上げ、関節を極めながらやんわりと窘める。
……舞をただのエロウェイトレスと思い狼藉を働いた男は、全員がこうして痛い目に遭っている。
女だと思って甘く見たようだが、不知火流忍術を極めた舞にとって、その辺の男の腕力など取るに足りない。
あっさり返り討ちにすると、静かな怒りを含んだトーンで強引に高額商品を注文させる。

【痛い痛い痛い！ 悪かったって！】

「あら、ごめんなさい♪ つい“手が滑って”♪

ではご注文は、ぼったくりオムライスでよろしいですね〜♪」

【えっ?! あ、じゃあ……それで……】

こうしてセクハラを諫め、更に金を落とさせるのに成功。
溜飲が少しは下がるものの、連日絶えないセクハラ客に舞は陰で溜息を吐く。

「はぁ……男ってほんと単純ねえ。でも、これでかなり稼いだわ。もう少し溜めたら出発ね……！」

目標額まであと少し。バイトも悪くないが、早く仲間と合流しなければ。
元の世界に戻った時を想像し、気を良くする舞だが……
今日のセクハラ客がまた何度も来店することを、舞はまだ知る由もなかった。

◆2 少しだけ

「いらっしやいませ〜♪ ……って、あなた昨日の……」

翌日。挨拶する舞の表情がすぐに曇る。
昨日のセクハラ客がまたやってきたのだ。
しかも入るや否や他の女性店員にセクハラしており、まるで反省していないことが一目で分かった。

「懲りずにまた来たのね……！ 言ったでしょ、当店ではお触りは……」

もみっ♥

「っ?! んっ、この……いい加減にきなさいっ！」

懲りどころか、セクハラ客はまた舞の胸に触れる。
その手をまた捻じり上げ、高額商品を注文させるのだが……
一瞬触れられた際、舞は不覚にも妙な疼きを感じてしまっていた。

(……今の、感じたわけじゃ……ないわよね……?)

でも、ここでの生活も長いし……私、知らず知らずの内に溜まっちゃってるのかも……)

極僅かとはいえ発情したなど認めたくないが、異世界では少なからず禁欲を強いられる。
そんな生活を続ける内に、欲求不満になっているのかもしれない。
そうやって“仕方ない”ものと考えることで、舞は今し方の身体の反応を強引に誤魔化した。

◆3 喘ぎ

「いらっしやい……またアンタ？」

三度やってきたセクハラ客。
もう顔も覚えており、目が合っただけで不快感が隠せない。
しかも反省しているならまだしも、にやにやした笑いと目付きはどう見ても今までの行動を省みていない。
今も大人しくしたと見せかけて、舞の身体に手を伸ばしてくる。
やはりあっさりと手首を掴むのだが……

ぎりっ！

「この……！ やめなさいって言ってるでしょっ！」

(こいつ、いい加減にしろよ……！)

もみゅんっ♥

「はあんっ♥ あ、この……っっ♥」

(なに、こいつの手♥ 急に動きが……ダメ♥ 腰の力が……抜けて……♥)

もう片方の手の追撃を胸に受けた途端、舞の身体に甘い電流が奔った。

前よりも遥かに大きい快感に、官能的な声が漏れる。

ただ触ってきているだけと思いきや、セクハラ客は思いの外にテクニシャンなのか、触れるか否かという繊細さ、弱いところをねちこく責める大胆さを併せ持つ手つきで舞の本能を煽り立ててくる。

身体から力が抜け、あわやセクハラに流されそうになるが、ギリギリのところで踏みとどまる。

「あ、あんたねえ……っ♥」

両手を掴み上げ、折る勢いで関節を極める。

店外に突き飛ばし、三度懲らしめることに成功したが……

そこで、セクハラ客ではない普通の客の視線が舞の尻に集まっていることに気付く。

「っっ?!」

(やだ、スカートめくれてたっ?)

セクハラでズリ上がっていたスカートを押さえ、丸見えになっていたパンツを隠す。

「ご……ごゆっくどうぞ～～♥」

セクハラ客だけでなく、普通の客にも間接的に舞の痴態を愉ませてしまった。

誤魔化すために澄ました態度をとろうとするも、顔は真っ赤になって羞恥を隠せない舞は逃げるように奥へと引っ込むのだった。

(もしかして、あいつ相当なテクニシャンなの……?)

いえ、あんな最低な奴に限って、そんなことあるわけ……)

セクハラ時の異様な感じぶり。

それを、ただ偶然変な声が出ただけ、偶然身体がそういう時期だっただけ……

舞はそう思い込むことで、快感を否定して仕事に集中した。

——……

—————……………

◆ 4 即落ち

また翌日。舞が奥で準備して店内に出てみれば、あのセクハラ客が既に他の店員を辱めていた。

舞のように強くないため、抵抗できずに触られ放題。

仲間がそんな状態とあり、舞の中の怒りが一線を超える。

「……懲りずにまた来たのね……！」

狼藉を働く手を捕り上げ、完全に拘束する。

もうこの男は、ただ追い払ったりするだけでは反省しない。

かといってこの世界では警察のような組織にも頼れない。
よって、舞は徹底して懲らしめることを決めた。

「さあ〜で……奥でゆっっくり、“お話” しましょうねえ〜♥」

今までにない、にこやかな笑顔。しかし深い怒りを孕んでいることは明らかであり、舞が本気で怒っているのが誰の目にも明らかであった。
セクハラ客が冷や汗を流すだけでなく、他の客や店員も血の気が引き、セクハラ客に同情すら抱く中、舞が男を奥の個室に連れ込んだ……

——……
————……

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♥♥

「あ♥♥ あんっ♥♥ やめ♥♥ やめなさいっ♥♥

あゝ……………——っっっ♥♥♥」

しかし数分後。
懲らしめられていたのは舞の方であった。
机で身体を支え、捧げるようにパンチラ尻を突き出した、
前屈みの立ちバックでセクハラ客に犯される。
しかもあろうことか表情は甘く蕩けており、到底『セクハラ客を注意する店員』ではなかった。

——セクハラ客のテクニックは舞の想像を遥かに超えていた。
まるで個室に連れ込まれることも想定していたように男は一転して抵抗、
セクハラで舞を脱力させてあっさり拘束から抜け出すと
愛撫で舞を追い詰め……後ろを取り、突き挿れた。

やはり勘違いや偶然などではなく、男は侮れない性戯技量の持ち主だった。
肉幹からも雄としての逞しさを痛感させられ、いいように喘がされる舞。
膣内射精目前となり、流石にこれには拒絶の感情が一回り強まるものの、
しかし——更に大きな、あまりにも大きな期待感が、強姦魔への憎しみを蹴散らした。

「だ♥♥ 出すつもりなのっ♥♥ やめなさい♥♥ んあっ♥♥ そ、それだけはあっ♥♥」
(ダメ♥♥ 今、中に出されたら♥♥ こんな奴に……気持ち良くなっちゃうっ♥♥)

ぱんぱんぱんぱんっ♥ ずばあんっ♥

「あ♥♥ いやあっ♥♥ 中はああっ♥♥♥」

ドブツ♥♥ ビュルルルルルルルルルッ♥♥

「いやああああああああああああああああああ♥♥♥」

凄まじい精力を放たれ、その威力に受精絶頂を余儀なくされる。
正義感を踏みにじられ、女として弄ばれ、犯され孕まされる屈辱と快楽。
その狭間で彷徨う舞に、逃げるセクハラ客を追うことなどできるはずもなく。
完全なるヤリ逃げを果たされるのであった……

「あ……♥♥♥ あああ……っ♥♥♥」

びくっ♥♥ びくんっ♥♥

(ま、まさか……♥♥♥ ここまで、されるなんて……♥♥♥
あいつ……絶対……許さ、ないんだからあ……っ♥♥♥)

◆5 リベンジ

陵辱されたことなど明かせるはずもなく、
何事もなかったように振る舞い、喫茶店で働き続ける舞。
翌日も出勤したが、セクハラ客はその日も来店しており、
また他のウェイトレスにちょっかいを出していた。

「……いらっしやいませえ～……」

(あいつ、昨日の今日でまた来てるの？ よくもまあ抜け抜けと……！
まあいいわ、そっちから来てくれて、探す手間が省けて好都合よ。
あの時のお返しはたっぷりさせてもらうわよ！)

ヤラれっぱなしで終わる舞ではない。
セクハラを注意し、ウェイトレスから剥がして店の奥へと引き摺って行く。

「いい加減にしなさいよアンタ……！ 今日こそきっちり躰けてやるわ……！」

今すぐ蹴りでも叩き込みたいところだが、他の客や店員が居る中で戦闘はできない。
遠慮なくお仕置きできるよう、また個室に連れ込む。

「……わかってるわよねえ？ あんなことしておいて、タダでは返さないわよ！」

前回は舞も油断していたが、今度はもう抜かりはない。
昨日されたことの恨みも込めて、舞は不知火流忍術を繰り出した。

——……
————……

◆B 1 分身で成敗！

「いらっしやいませ……またあなたなの？
……何よ、まさか……またセクハラする気なの……？」

舞を自分のものであるかのように舐めた態度をとるセクハラ客。
今日も舞に触れようとするが……前方にいるはずの舞の音が、後ろから聞こえて驚愕する。

『はあい♪』

振り向くと、そこには忍装束を着た、もう一人の舞が立っていた。
独りでは敵わないと悟った舞は、ついに奥義の一つ、分身を解禁。
一対一では成すが儘であったセクハラ客にも、これなら圧倒的優位に対応できる。
セクハラ客も舞が二人となって顔色を変える。

「あら、驚かせちゃった？」

『こっちは分身よ。私がかくノーだって、教えてなかったかしら』

女一人だからこそ男にいいようにされていたが、
分身した今……手数が力の差を補って、完全に戦力差が逆転する。

「じゃ、そういうわけだから……くノーを本気にさせた報い、受けてもらうわよ！」

『不知火流忍術の本気、味わいなさいっ！』

「花蝶扇！」

『小夜千鳥！』

「龍炎舞！」

『夢桜！』

「風車崩し！」

『乱れ花蝶扇！』

「超必殺！ 忍蜂！」

『不知火流裏奥義！』

『『よっっ！！ 日本一～～♪』』

分身体との連続攻撃に、全く手も足も出ないセクハラ客。
今までと違って完全に蹴散らされていったのを見送ると、
舞も決めポーズをとり、痴漢撃退をパフォーマンスとして演出する。

「いい加減にこれで観念して、次は普通の客として来ることね！」

『それでも、またオイタするなら、いつでも相手してあげるわ！』

因縁のある相手に完全勝利を果たし、店の治安を守った舞。
セクハラを断じて許さない信念を他の客たちにもアピールし、
分身と共に、勝利の美酒を味わうのだった。

——完……？

◆B2 分身すれば負けたりするわけ……

「いらっしやいませ～♪」

舞は分身を使うようになってから、
ついにセクハラタダハメ穴生活から脱することができた。
今日も持ち前の艶と明るさを持つ声で客を癒し、
あのセクハラ客が来ても余裕の対応を見せている。

「なに？」

『またセクハラするつもりじゃないでしょうねえ？』

分身で死角をなくせば、もうセクハラされることはない。
目を光らせる内、流石にセクハラ客も大人しくなってくる。
治安を取り戻し、健全な客も戻ってきて、店は本来の意味で繁盛し出す。
……と、そうなればまた忙しくなるのが必然。
他の客のオーダーに応じるため、
分身含めて二人の舞が振り返った瞬間。

「あ、すいませえん、お待たせしまし……」

がしっ♥

「きゃっ?!」

『えっ——あんた、なにやって』

もみっ♥

『あっ……!』

忙しさのあまり、ほんの一瞬目を離した隙。
その間隙を縫って、男は本体の尻、分身の胸を揉みしだいた。

まさか、全く懲っていないとは——思いがけない刺激に可愛い声が出てしまうが、

「っ、この……ふざけないで！」

バキッ！ ドガッ！

『もうあんたの相手してる暇はないのよっ！』

すぐさま反撃。

流石にもう看過できない。ここで確実に仕留めようと蹴りを放ったのだが、

力加減を誤って店外に叩き出してしまう

追いかけていたいところだが、店はちょうど忙しい時間帯。事情を知らない者の目もあり、舞は店に留まった。

「はぁ……はぁ……」

『……全く……懲りないんだから……』

それにしても……もう克服したと思ったはずなのに、今し方のセクハラで思わず体温が上がってしまった。

やはりセクハラには感じてしまうのか……とも思うが、分身を保つことは大きな負担がかかる。

この熱は愛撫によるものではなく、忍術の疲労なのだと舞は思い込む。

だが、本体と分身が同時に受ける刺激、感覚は二人分で通常の二倍——

否、相乗効果を生んで何倍にもなることを、舞はまだ知らなかった……

◆B3 分身すれば……負けたり……しない……！

「いらっしや……」

『またアンタ？』

相変わらずやってくるセクハラ客。しかも今回はお供つき。

二人なら分身した舞たちにも敵うと思っているのだろうか。

しつこすぎる下衆共にうんざりするが、確実に仕留めたいと思っている舞にとって、来てくれるのは好都合。前回のよう後ろを向き……

ぎちっ！

「もうその手は食わないわよ！」

ぎりぎりっ！

『さぁ！ 大人しく裏に来てもらおうわ！ 何度も何度も……覚悟なさい！』

あっさりと手を掴み上げ、拘束。

やはり分身すれば、こんな男など相手ではない。

舞は心底から安堵して、ようやく男への折檻ができることに小さな歓喜すら覚える。

(これでようやく……このセクハラ野郎たちともオサラバね♪)

——……

————……

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♥

「おおほっ♥♥ なんでも♥♥ どうして♥♥ こんな奴にいいっ♥♥

いやっ♥♥ もう負けたくない♥♥ 負けたり、んおっ♥♥」

『やめっ♥♥ やめなさいっ♥♥ 今なら♥♥ あっダメ♥♥ ダメっ♥♥ いやあああっ♥♥』

ドプウッ♥♥ ゴプッ♥♥ ビュルルルルルルルルルッ♥♥

「んほおおおおおおおっ♥♥♥

こんな最低な奴に♥♥♥ またっ♥♥♥ またああああ♥♥♥」

『アっへええええええっ♥♥♥ イグイグイグイグうっ♥♥♥

セクハラおちんちんにまた負けるううううううっ♥♥♥』

——しかし、折檻されるのはドスケベくノ一の二人であった——

くノ一が奥義まで使っておきながら、まさかの乱交種漬け堕ち。
一体何があったのかは、二人の舞と二人のセクハラ客のみぞ知る——

◆B4 分身すればたった一人のセクハラ客には負けたりしない！